

相貌で無い。(是四)、他宗の人の發心行は「若欲住三佛道」の如くでない。(是五)、(然しながら小生考ふるに、吾等の祖先は他宗より法華に轉入したであらう。然らば講師の言、過乘なるに非ずや)。合掌も供養も機成する事を表す。他宗の人に此の如き儀相ありや。(是六)、「如し是供養シ己テ自ラ欣慶シ我レ大利ヲ獲タリ」と云ふが、如法折伏の説法は訪者心を激動する事必然である。(是七)、「上野殿書」は信者の供養を歎じて法師品の文を引く。(是八)、信者の供養を歎するの文は數多いが、訪者の供養を歎じた證は無い。(是九)

(四)

此れより以下、三個の問答を過ぎて、愈々本格的の「破奠記」に入り、十六個條を彈するのであるが、紙面の關係上此處に筆を止むるのである。此れ「破奠記」隙見の隙見なる所以かも知れぬ。

最後に諸君が學行の餘暇に研究されるなれば興味深い問題も多々ある事と思ふ。然して不受不施の義は講師を以て祖とし、講師を以て末としたいものである。何故かと言ふに此の主張は餘りにも「布施」の義に執するを以て、稍もすれば曲解を醸し易く、且精神的の裏面に物質的觀念深浸せる故に、獨善を以て尊しとするの感を生ぜしむ。かゝる觀念は一面に於ては祖意に沿ふ處あらんも、多面に於ては訪者救濟の道無く、訪者を嫌避するの念を興さしめ、畢竟祖意の表のみ知りて、底を知らざる

の扁道を歩ましむるに至るやも計り難い。例せば法律のみによりにて罪を裁かんとする者の如く、罪を憎みて人を憎まずの寛胸を失するの嫌あり。故に講師の主張は了するは可なるも、實行に移すは宗門の危期を再度招くの災を致すであらう。吾等が講師の主旨を生かすの道は、不受不施の義は吾等の弱情の信心を強情にせしめんとせし「慈悲の鐵錘也」と銘記して自己の責任に邁進する事ではあるまいか。(高2)

(完)

(祖山學院在學、於麓坊)

電力工事場

臥 龍

限られた人の力で

無限の威力を發揮せんとする